「見出し」から「意見」まで
－問題点を見つける－

日向学院高等学校
教諭　黒　岩　充　秀

1、はじめに

本校では「総合的な学習の時間」の中に「論文を書く」と言う最終目標を掲げながらの文章指導を行っている。

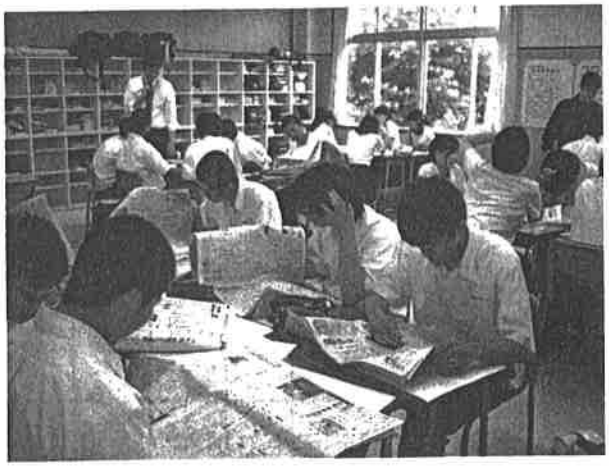
活字離れの進む昨今、全国的に活字を通して自分なりの思考をする機会が減少しているといわれている。自分の身の回りで今、何が問題となっているのか、そのことに対してどういう見方がなされているのかは、パソコンの画面に頼っている現状が多く認められる。

そこで、実際に自ら新聞を読み、「何が、どのように書かれているのか」を手始めに、「書かれていることに対して自分はどのように考えるか」に目標を設定しながら「論文」にまでたどり着きたい。そのためには「問題点の発掘」に課題があると考える。自分なりの意見を求められても「どこが問題なのか」を探ることに不慣れな生徒は指導者の指摘の一言を待っている状況もある。

そこで、実際の読みを通して「問題点を探る」姿勢を育成することとした。宮崎日日新聞社から小川清一郎氏に来ていただき、「各新聞社によって第1面の大見出しは問題点把握の仕方によって違うんだ」ということを話していただいた。この時点から新聞社によって扱う記事、問題点は異なるのだということを学んだことであった。

2、「読む」まえに

これまでに生徒は、文章スキルを重ねてきている　しかし、ここで「語彙力」の問題が指摘される。マスコミ等での社会人の発言の状況を聞いていると、あながち生徒の語彙力のなさを努力不足の一言で片づけるわけにはいかない。社会的な目を育成していくためにも語彙力を高め、あらゆる学習に対してでもあるが、そのことが障壁とならないようにしたいものである。「語彙力がなく、学習が妨げられたと感じたことはありますか」という質問に対して大学生・高校生合計441名の60%が「はい」と答えている。(ベネッセ資料から)



3、これまでの活動

1年次

＊さまざまな新聞を読む

＊感想を書き留めておく

2年次

＊興味、関心を抱いた記事の意見文を書く

＊グループで自分の選んだ記事を出し合い、一つに絞ってクラスで発表する

4、実践の様子

① 新聞各社と記事の扱い

宮崎日日新聞、朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞、西日本新聞、毎日新聞の6社の新聞をNIE活動として協力してい

ただいた。

そこで、各社の１面トップ記事「消費税関係」「復興関係」「東電関係」「アベノミクス関係」「0増5減関係」など。1面と2面との違いはあったが掲載されている共通の記事がほとんどではあった。痛烈な書き方、穏やかな書き方はなされていたが、生徒が語句の持つ特性に敏感に反応したかはわからなかったが、関心を抱いた様子がうかがわれ、熱心に読む姿があった。

②「感想」を書く

あらゆる分野の記事で興味、関心を抱いたものについての感想を書かせた。「政治関係」もあり、「事件・事故関係」「生活関係」「経済関係」「スポーツ関係」などいろいろな分野、方面のものが提出された。その文章を見てみると、単発的な言葉での表現の多さが目立ち、具体的にどうであったという表現部分が少ないように思えた。中には自分の体験をうまく入れて書いているものもあった。これまでのスキルの成果なのかもしれない。と同時に平板なものに仕上がっていってしまうという懸念もおきた。とにかく1年次においては「書く」ということにポイントを絞っていたのであるから多少書くことができるようになったことで2年次の実践につながっていった。

③ 問題点をとらえてグループとしての「意見文」を書く

事の真相や人情の機微を的確に指摘することを「うがったことを言う」ということがある。また「うがち過ぎて」となると、詮索しすぎて真実からかけ離れていくことになる。

「書かれていることに対して自分はどのように考えるか」という設定で2年次の実践が始まった。記事の中に見られる問題点と思えるところに目を向けての「意見」を書こうというものである。「言い過ぎやろ」「現実問題としてそうか」「地域によって観点が違う」「政府としてもっと・・・」など「批判的」な姿勢が言葉になって出てきていた。このことは、記事を分析的に読もうとすることの表れであり、「問題点の発掘」につながる大切な部分ではないだろうか。「いちゃもん」ともとられるような態度かもしれないが、「思考」することから「本当のところはどうか」という探求が始まっていくと考えたい。あえて話し合っていることに口出しは一切しなかった。自分たちを取り巻く事件、事象を意識して、真剣に考えてみようという場面を目論んでいたのであるからグループとしての活動としては良かったと判断した。それぞれに選んだ記事がグループの話の場に上がった。お互いの意識の違いがはっきり表れているところもあった。知識的なことでの迫り方をする場面もあった。

ここでも「語彙力」の差などが微妙に意見、論調の強さを左右していた。険悪な雰囲気にはならなかったが、議論することに慣れていない生徒にとっては貴重な一歩であったと思う。やがて、一つの記事が「模造紙」に書かれていった。「壁

新聞」を小・中学校で経験しているのでその方式に任せた。

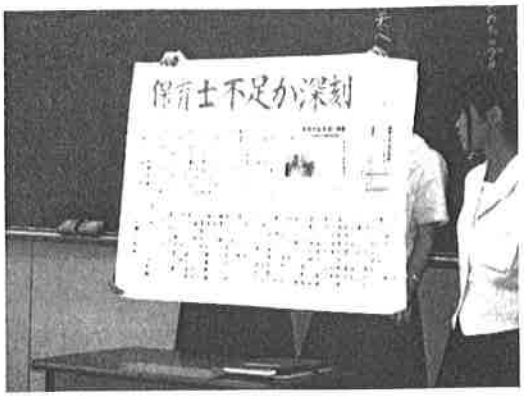
④「発表」する

グループ発表されたものを挙げてみる。

＊「体罰問題」
＊「米国　女性監禁事件」
＊「東大推薦」
＊「いじめ」
＊「北朝鮮問題」
＊「保育士不足」
＊「交通弱者からの声」
＊「小６女児溺れる」
＊「救助犬」
＊「米国　銃社会制度について」
＊「原発の必要性」
＊「警察は総力をあげて事件解決を」
＊「市民連帯で備える」
＊「裁判員制度見直し」
＊「新しい振興対策に知恵絞る」
＊「学力テスト」

などが目立った。

他のグループが取り上げた記事を知ることにより、また、発表を聞くことにより、自分たちの選んだ記事に対しての観点の設定、探求の仕方はこれでよかったのか、などといった深まりがあり、「もう１回発表はできないのか」という場面が生まれた。



ここで、「その中の保育士不足が深刻」を紹介しておく。

現在の日本は少子高齢化であるため、子供の数は減少していると思っていた。さらに保育士という職業は人気があるものだと思っていたが、現状はそうではないようだ。

保育士が不足している大きな原因に労働条件が挙げられる。我々の保育士の客観的なイメージは小さな子供と関わりながら子供の成長をサポートするプラスのイメージが強く、あまり硬いイメージがない。しかし、実際の現状を見てみると、そうではないようだ。

共働きする夫婦が増えていく中で、子供を長時間安心して預けられる場所が必要とされている。それに従い、保育士の勤務時間も増加し、夜間勤務や早朝勤務による保育士自身の負担が大きくなっている。保育士の登録者数は増加傾向にあるのに対し、常勤保育士の数が少ない理由はここにあるようだ。また、保育士の数が減少していく中で、認可保育所まで減少しているため、さらに問題は深刻化している。

現在出されている策に「子供の園」というものがある。「子供の園」というのは、保育所と幼稚園を融合したものである。ここでは、保育士と幼稚園教諭の資格を持った人が一緒に働くことができるので、

認可保育所への入所を待っている待機児童の数が減少するのではないだろうか。

5、終わりに

新聞を読むことを通して自分たちの身の回りにおきていることの「真実」を探ろうとする姿勢は重要である。「書かれていないこと」「隠れていること」を追求することによって一段と思考は深まっていく。ややもすると、他者の判断に追随、迎合する傾向の強い今日にあって、自分自身の意見を保持していくことは、生徒の一層の発展につながっていくものと思う。「語彙力」といった部分でのことも厳然としてあるが、「なんとかして読んでみよう」という気持ちを持たせることで、これからの青少年の生きる社会は豊かなものになっていくと考えての指導の一つにさせていただいた。